

書評と紹介

鈴木彩加著

『女性たちの保守運動』

——右傾化する日本社会の
ジェンダー』



評者：海妻 径子

本書の概要と意義

保守運動にかかわる女性たちをジェンダー視点で本格的に分析した、待望の書である。

評者が著者の研究を知ったのは、2010年代中頃の某学会でおこなわれた、地方の女性たちの草の根保守運動についての個人研究報告によってであった。猖獗を極めたバックラッシュ（フェミニズムへの保守派の攻撃）が何とか一段落し、市町村主催の市民向けイベントで「ジェンダー」という言葉を使わないよう主催者からクギを刺される、ということがようやく無くなってきたものの、「(女性を含む)市民からの声」というかたちで男女共同参画施策が後退させられた、ということに多くのフェミニストが衝撃を受けていた時期である。この衝撃に研究という武器で立ち向かっていこうという動きがあらわれたことを、研究報告の一聴衆として大変嬉しく頼もしく感じたのを、昨日のこのように思い出す。

草の根保守運動に対するフィールド調査研究としては、2003年に既に小熊英二・上野陽子

の『“癒し”のナショナリズム』（慶應大学出版会）が上梓され、注目を集めていた。だが個々人の信条を鮮明にすることが求められる政治運動の場に、信条を異にする者が参与観察することの難しさ、あるいは得られたデータの用い方をめぐる研究倫理上の問題や、インフォーマントからのクレームの可能性、等の理由により、同様の研究が量産される状況にないことは明らかであった。調査実施当時大学院生であった著者が、類似の研究が少ない中で不安を抱えつつ、いかに多くの困難に立ち向かい、博士論文としての研究成果提出そして本書刊行にまでこぎつけたかと思うと、心からの敬意を表さずにはいられない。

本書は三部構成となっており、うち第一部は、「保守」概念の整理、および保守運動史を整理しそこへの女性参加状況を跡づけた第一章と、米国の先行研究をもとに保守女性運動研究の理論的整理をおこなった第二章からなる。本書の理論的バックボーンが示されているのが、この第一部であるといえよう。

続く第二部は、以下の3つの章より構成されている。まず、いわゆる「バックラッシュ」以前からの戦後保守運動の代表的な担い手として日本遺族会を分析対象に選び、当該団体会報記事において、女性の働かざるを得ない現実を直視しその社会的重要性を提起する面を有していたはずの「苦勞する母親」言説が、次第に歴史化されて薄れ、それと交代するように、固定的性別役割観と結びついた「家族の価値」言説が浮上した過程を明らかにした、第三章。次に、『正論』ほかの保守系論壇誌や草の根保守運動女性グループ会報『なでしこ通信』の2000年代の記事分析をもとに、主婦自身によるバック

ラッシュ言説と、主婦を称揚しつつも主眼は家族を基盤とした国家の重要視にある保守「主流派」のバックラッシュ言説とのあいだの亀裂、および両者の節合に女性保守知識人が果たす役割を指摘した、第四章。そして、愛媛県の草の根保守女性グループの活動の語りの中で、家族をめぐる言説がどのような役割を果たしているのかを明らかにし、第三部への導入ともなっている第五章である。この第二部において、女性自身を垂直的なジェンダー秩序に閉じ込めるような家族主義的言説を、草の根保守運動の女性参加者が選び取り主張していく回路がどのように成立するのかが、多角的に示されるのである。

そして第三部ではいよいよ、2000年代以降に明確な排外主義的主張をおこない注目された在特会等いわゆる「行動する保守」女性活動家の、行動や発話・言説分析が3つの章において展開される。第六章では、「行動する保守」諸団体によるYouTube投稿動画が分析され、女性活動家がしばしば同じ団体の男性活動家に活動のイニシアチブを奪われていること、そしてそれゆえにこそ男性活動家が扱うと「女性蔑視」とみなされる可能性がある「慰安婦」問題が、「行動する保守」女性活動家により「自分たちにしか扱えないイシュー」として選好されていることが明らかにされる。第七章ではある「行動する保守」グループの活動への参与観察、および聞き取り調査から、参加者間の相互行為におけるミクロなジェンダー・ポリティクスがあぶりだされる。男性活動家たちが「慰安婦」への揶揄をジョークとして共有することでつながりを深めるのに対し、気まずく沈黙することしかできない女性活動家たちの姿などが示される。

最後に、終章（第八章）において本書全体が総括される。男女共同参画施策が推し進める家庭内ケア責任の公平化や、「慰安婦」問題が突きつける性暴力や性産業による搾取問題など、

男性活動家に扱いづらい「ドメスティックな」領域の問題が保守運動のトピックとなることが、それまでに既に一定の運動参加をしていた女性活動家を、その扱いづらい問題の担い手として可視化していったことが、示される。そして女性たちの保守運動は、男性のそれとの緊張関係をはらんでおり、今後欧米でみられるような「保守フェミニズム」、すなわち保守・右翼的主張を展開しつつ同時に「女性」という集合的アイデンティティに依拠し、男性と対等な運動参加を訴えるような女性運動が、日本でも起こりえる可能性が示唆されるのである。

本書は、女性による保守運動に対し、理論的整理から言説分析、フィールドワーク調査と、多角的総合的に迫った書であるというだけではない。女性自身を垂直的なジェンダー秩序に閉じ込めるような家族言説を、女性を選び取り主張していく過程について、単純な「虚偽意識」論で説明するのではなく、分析対象が有する内的論理に分け入っているという点で、実に画期的な研究である。

今後の研究課題——男性許容論理および生活者運動の訴求力低下の解明

このように本書に高い意義があることをおさえつつ、以下に、著者同様に女性の保守運動に高い関心を持つ評者が、本書を読んで感じた疑問等を述べたい。ただしそれらは本書自体が研究として抱える限界や課題というよりも、むしろ日本における女性保守運動研究が今後取り組むべき課題であることを、あらかじめ付言しておく。

本書では、女性たちの保守運動が男性のそれとの緊張関係をはらむことが示されている。しかし考えてみれば、フェミニズム運動自体が反体制運動の男性中心主義に対する反発とそれにもとづいた分離独立の動きからしばしば発生し

ており、今日においても「反体制運動内部での、女性活動家と男性活動家との緊張関係」は存在していると、少なくともフェミニズム運動にアイデンティファイする者は捉えているであろう。デモや集会において女性活動家のイニシアチブを、男性活動家が途中から「熱中のあまり」奪ってしまうとか、警察やいわゆる「カウンター」のいやがらせ対策における、男性活動家の「女を俺たちが守ってやる」的パターン的な態度。非正規労働者として若年男性が暗黙理に前提されたり、反天皇制の表現として女性皇族への性的揶揄が用いられたり、等々の事柄をめぐる、男女活動家間の緊張関係である。

その意味で、女性活動家が男性活動家の行動に辟易しつつも、グループを離脱せず大義やミッションのために活動を続けるのは、左右いずれの社会運動にも共通する現象であると言えなくもない。保守運動においては、大義やミッション自体が女性を従属的地位に位置付けるものであるため、運動内に女性活動家にとどまり続けることがより奇異に感じられやすいが、保守運動女性活動家からすれば、反体制運動の女性活動家の方が、よほど欺瞞的關係性を甘受しているようにみえるかもしれないのである。

したがって、左派の社会運動からフェミニズム運動が分離出現したのならば同様に、右派の社会運動からも女性運動すなわち「保守フェミニズム」が分離出現する可能性がある、という著者の指摘に、評者は大いに頷く（その出現が喜ばしいことかどうかはともかく）。と同時に、少なくとも現時点までの日本においては、能力も主体性もある女性活動家が保守運動内にとどまり続けているが、仮にそれに対して「なぜ彼女たちは上下関係を甘受し続けるのか」という表面的な問題設定をしてしまうならば、保守運動女性活動家の内的論理を読み解くことはできないと、評者は自省も込めて思うのである。

繰り返しになるが、女性活動家が男性活動家の行動に辟易しつつも、一定の理由からグループにとどまって活動を続けるのは、左右いずれの社会運動にも共通する現象なのである。重要なのは上下関係の有無それ自体ではなく、女性活動家がどのような論理を用いて男性活動家の抑圧的行動を許容可能なものへと解釈しているのか、あるいはどのような要素が、男性活動家の抑圧的行動を差し引いても運動内にとどまることにメリットがあると、女性活動家に感じさせているのか、ということまで踏み込む分析なのではないだろうか。

その点で本書は、保守運動における女性活動家の、男性活動家の抑圧的行動に対する「沈黙」や「気まずい」雰囲気存在を明らかにするものの、さらに踏み込んで、ときに抑圧的行動をおこす男性活動家を、女性活動家がどのような理屈をつけて許容しているのかまでは示していない。それが吐露されるほどの懐深い関係を調査対象者と築く参与観察が、容易ではないことの帰結であることを考えれば、これは評者の高すぎる注文であるともまずは認めねばなるまい。とはいえ評者はかつて、女性蔑視発言を繰り返していた米国トランプ大統領支持の女性たちによるネット・コラムに、彼が結婚離婚を何度も繰り返しつつ生まれた子はすべて引き取り扶養していることを評価する記述がある点に、注目したことがある。何らかの方法を模索して、保守運動女性活動家が、男性活動家の抑圧的行動を許容する論理やバーター要素となっているものが何かを、明らかにしていきたいものである。

さらに言えば、女性保守運動家の顕在化あるいは増加という現象を考えると、保守イデオロギーや保守運動自体のあり方が、いかに女性たちを魅了し取り込んだかという面だけではなく、何かしら社会活動をしたいと望む女性た

ちを、なぜ保守以外の運動が十分に取り込み得なかったのかという面も、検討する必要があると評者は考えている。たとえば、同じように「性別役割を前提としたケアの重要性」を主張する運動であっても、いわゆるかつての構造改革派的な、中道で排外主義とは一線を画す生活者運動にではなく、「行動する保守」へと、主婦アイデンティティを持つ比較的若い世代の女性たちが吸引されていくのはなぜだろうか。

このことに関連して、本書で印象深い記述のひとつに、とある「行動する保守」女性グループが都内の公共施設を利用して、メンバー外にもオープンで催している「東北復興支援料理教室」で観察された、食材の産地をめぐるやりとりがある。あるとき会長を含む4人のグループで調理作業中に、ひとりの参加者が食材のパプリカについて、市販されているほとんどが韓国産であり、この料理教室でも同国産が用いられているのではないかと示唆する発言をした。すると次の回の料理教室で、料理講師と会長が参加者全員を相手にした調理手順の説明の際に、食材の産地が日本産であることにわざわざ言及したというのである (pp.280-281)。

著者はこのエピソードを、当該女性グループが「嫌韓」ジョークを参加者同士でやりとりすることにより、集合的アイデンティティを共有し、またその集団における適切な行為を作り出し固定化している出来事として言及する。それはまさしくその通りであるが、評者が注目するのはこの「食材の産地を気にかける」という行為こそ、長らく生活者運動において、日本の主婦を国内の農村のみならず第三世界の生産者との、社会的連帯に結びつける代表的契機とされてきた、という点である。安全な食材を求める、という家事従事者の行為の普遍性こそが、国境を越え得るとかつては主張されていたのである。日本企業と直接的な雇用関係にない専業

主婦こそが、インターナショナルで反資本主義的な社会的連帯の担い手たりえる、という主張が、2000年代以降の日本の主婦に訴求しなくなったとすれば、それはなぜなのであろうか。

本書において著者は、「[ケア・フェミニズム]は性別・年齢・障害の有無・階級・人種といった属性の違いを超えて、すべての人に「ケアされる権利」と「ケアする権利」が保障された社会を理想とする。他方で(略)男女共同参画反対運動に参加する女性たちはケアの社会的意義を訴えてはいるものの(略)性別役割は疑問に付さない」、そのため「容易に「保守」の言説へと接続されてしまう」(pp.307-309, 傍点原文ママ)と述べる。だが、反原発運動をはじめとする80年代のインターナショナルな反体制運動の担い手として、いわゆる「活動主婦」がいかに存在感を放っていたかを知る評者としては、性別役割意識を保持しつつケアの社会的意義を訴える女性たちが、どのような社会運動へ接続していくかはさほど単純に決まるものではない、と思えてならない。保守運動への女性参加を分析する作業は、反体制運動の女性アクターのつかみ損ねを分析することへも、展開していく必要があると評者は考えるのである。

保守運動における男性知識人とは何か

ところで、評者自身はこれまで、本書が「女性知識人」と呼ぶ、保守系女性政治家や保守系女性文化人の言説分析をおこなってきた。本書で彼女たちは「一方で、知識人という立場で「主流派」の男性知識人と同じように家族を社会・国家の基礎とする論理を用いる(略)。他方で、女性知識人たちは「主婦」の立場から自身の家事・育児などの経験や家族との心的交流のエピソードも語っている(略)。このように、二つの立場と論理を併存させている女性知識人特有の言説として、個別具体的な家族のエピ

ソードがそのまま社会・国家というマクロな文脈へと接続されているというものがみられる(略)。「わが子の幸せ」を祈る家庭内の伝統行事がそのまま「日本民族の幸せ」へと「自然に」接続されている」(pp.164-165)と指摘される。そして「(保守論壇でのバックラッシュ)「主流派」の最終的な目標が男女共同参画社会基本法の廃止である一方で、(バックラッシュに参加している)「主婦」たちが主張する家事・育児・介護の意義と価値の社会的承認は、「主流派」が意図する目標だけでは達成され得るものではない(略)。女性知識人の論理は、この相反する両者を媒介しあつかも両者が連続しているかのように見せる役割を有しているのではないだろうか」(p.166, ()内は評者による補足)と分析されている。

保守運動女性知識人が、しばしば自らの「主婦」としての辛い体験や抱えてきた葛藤のディテールを語り、にもかかわらずその辛さや葛藤は「日本という国家」およびその「伝統」と「つながる」ことで解消可能であると述べることは、評者も自らの分析で確認してきた。女性知識人の語る「主婦」体験のリアリティが、「天下国家」が語られる保守運動へと草の根の主婦たちが誘われる大きな吸引力となっているという指摘についても、同感である。

だが考えてみれば、農村の貧困のような「草の根の辛さや葛藤」を取り上げて承認した上で、それらは「日本という国家」およびその「伝統」と「つながる」ことで解消可能であると述べる、というのは、戦前の農本主義ナショナリズムの主流にして定型的な語り方である。そのことに気づくとき、実は保守運動というのがそもそも、「草の根の辛さや葛藤」と「天下国家の重視」という矛盾するはずのものを節合するものであり、むしろその節合が成立したときに保守運動が大衆的社会運動として力を持

つと捉えるべきなのではないか、と評者には思えるのである。

そのように捉えたとき、むしろ検証すべきは日本の保守運動男性知識人の「体験的言語の無さ」の方なのかもしれない——いや、もしかしてあるのだろうか? 「嫌韓」「嫌中」を語る言葉はあふれているし、それが外交政策や社会保障制度のあり方などの「天下国家」語りへと節合はされている。しかし「嫌韓」「嫌中」は「草の根の辛さや葛藤」の表現なのだろうか?

日本の保守運動における女性活動家の前景化には、「慰安婦」問題などの男性活動家に扱いつらい「ドメスティックな」領域の問題が保守運動のトピックとなったという、本書が指摘する側面に加えて、家事・育児・介護以外の「草の根の辛さや葛藤」を男性知識人たちが言語化できておらず、したがってそのような「草の根の辛さや葛藤」を抱える人たちを、保守運動がアクターとして取り込めていない、という側面もあるのではないだろうか。評者は保守運動の成功を願うわけではなく、むしろ反対の立場なのではあるが、しかし男性知識人の「体験的言語の無さ」ゆえに、家事・育児・介護という「草の根の辛さや葛藤」を言語化できる女性知識人が保守運動で影響力を増し、草の根の主婦が保守運動の貴重なアクターとして期待されていくとすれば、それをフェミニストとしてどう考えるべきか、悩ましい。いずれにせよ保守運動分析も、女性のみを有徴化して分析するのではなく、男性を男性としてジェンダー化して分析する。その必要性を指摘して、筆を置くこととしたい。

(鈴木彩加著『女性たちの保守運動——右傾化する日本社会のジェンダー』人文書院, 2019年12月, 342頁, 定価4,950円(税込))

(かいづま・けいこ 岩手大学人文社会科学部教授)